

社団法人韓国ニュースポーツ協会の ISCO-OP 受け入れ

社団法人 韓国ニュースポーツ協会

徐 相玉(ソ サンオク)

ISCO-OP の導入の背景

2008年6月、鹿屋体育大学の ISCO-OP 関係者(川西正志教授ほか3人)が直接協会を訪問され、インターンシップ開催の背景とその意義、効果などについての説明があり、それに関連する資料及び情報が提供された。

ISCO-OP の展開において、「現代のスポーツ産業界での業種間のボーダレス化、多様化、高度化に対応できる実践的な現場での総合的なマネジメント能力の育成が、キャリア形成の観点からも重要課題」であり、「変化する社会での体育・スポーツに関する専門的ニーズや指導プログラムの対応できるプログラム」(川西正志、2007)を受け入れるのは極く当たり前の決定であろう。

“創造性豊かなクリエイターやビジネスを創出するプロデューサーの育成”が協会でも急務の課題であり、そのためのインターンシップが人材育成・活用における有効な解決策の一つであると判断した。それを受けて、協会では産学連携に基づく新たな人材育成システムである ISCO-OP の計画全般に賛同し、希望者の方住月氏の受け入れを快く決定した。

協会の設立と活動事業

社団法人韓国ニュースポーツ協会(以下、協会とする)は“ニュースポーツを通じて健康な国民育成と社会づくりに寄与し学校体育の普及・振興とともに生活体育の普及・振興のために子どもから高齢者まで全国民を対象とした新しいスポーツを開発・普及し、健全な国民づくり、また国際親善に寄与することを目的として文化体育観光部(日本の文部科学省に当たる)所管非営利団体として2006年1月26日に設立された。

主な事業は、指導者養成(ニュースポーツ指導者、幼児及びシルバースポーツ指導者、教員研修)、イベント(全国ニュースポーツ大会開催)、社会活動(幼児・青少年・高齢者・障害者を対象としたニュースポーツ指導)、国際交流(日本・中国・台湾など、ニュースポーツ関連団体との交流)、研究活動(ニュースポーツ関連研究、ニュースポーツプログラム及び用具の開発)、出版事業(ニュ

ースポーツ指導書,ビデオ制作)などを行っている。その詳細内容については、発表当日に紹介させて頂くことにする。

ISCO-OP の効果

インターンシップのメリット(萩裕美子、2008)が参加者側が“指導者としての適性を把握する機会を得、将来の職業選択に役立てること、実習を通じて自分の長・短所を認識する機会を獲得する”など、これから社会進出への準備を具体化できるようになると期待できるとした。一方、実習先側は“現時点での大学生の実態を把握するとともに、現場の活性化に活用でき、それによって未来の人材を確保しうる機会を獲得できる点、更に大学との連携が図られ、大学との様々な情報交換ができる”という点をあげている。

参加者の方住月氏は協会が実施する日韓学術交流セミナー、幼児体育講習会、教員を対象にするニュースポーツ講習会、ニュースポーツ体験イベント、子どもを対象としたスポーツキャンプなど実に多様なプログラムにスタッフとして参加し、自分の能力を思う存分発揮した。

1ヶ月という短い期間ではあったが、協会が開催する殆どのイベントに参加し、協会の期待以上に良く働いて貰った。これは日本での経験を十分に生かせる体験の場であった筈であろう。これは彼女のスポーツ専門職に求められる資質(指導力、接遇能力、施設管理・運営能力、マネジメント能力など)を全て発揮した場でもあったように思われた。

勿論、インターンシップの経験が直に役立てるというわけではないが、インターンを経験した者は自分の将来のキャリア形成に向けた学習計画の見直しの契機としたり、正しい職業意識を身に付ける機会として活用できればそれも一つの成果であろう。

協会のこれからの課題

協会は実に得した一ヶ月であった。まず、送られた人材(方住月)によって充実したイベントも出来た。それに日本の国立大学との連携も自然に出来た。大学関係者との交流も出来た。その一方で、協会としての課題として、より具体的に送る側(学校)のニーズを事前(インターンシップ開始の前)に把握し、インターンシップが開始と同時に仕事に着手できるようにする準備態勢を整えるべきであることが分かった。

今までのプログラムの展開における現状と課題を綿密に研究し、それを韓国の実情に合わせる工夫を深める努力が必要であることが分かった。

韓国におけるスポーツ界・スポーツ産業界に取り入れるべきこの課題を、先ずは韓国の実情の把握とともに、インターンシップ制の推進団体として一つの事例として成功させるケースとして紹介させていく様々な方法を考えなければならないと考えている。

韓国における ISCO-OP 展開の可能性

インターンシップの効果は高く評価すべきである。韓国においてもインターンシップは様々な方法で行われてはいるものの、体育・スポーツ界では非常に少ないのが現状である。師範大学の体育教育(学)科での教員養成プログラムとして教育実習がその一つであろう。しかしながらスポーツ産業がスポーツ関連職を広めつつある現実を考えると現場を体験できるインターンシップの場は未だに少ない。

スポーツ団体・興行団の雇用と採用に関する調査(2006)では、体育系大学出身であること、高校・大学で運動部であったこと、当該競技の経験があること、大学院・大学・専門大学等でスポーツマネジメントを学んだこと、当該業界でのインターンシップ経験があること、語学力があることなどを採用の重要ポイントとしている。

この多様な要素の中で、インターンシップの経験は他の要素とは異なり、自分ひとりで経験できるものではない。制度的に積極的に取り入れようとする学校側と企業側、即ち産学の共同連携が出来なければ実践できないことである。両方の発展に結び付ける ISCO-OP の効果をより活かす、養成される良き指導者を切に望んでいる多くの人々へ送るべきであろう。

終わりに

正直に“スポーツ専門職のための実践的なキャリアトレーニングプログラムの開発に関する CO-OP 国際研究フォーラム 2007”の一冊は大きなショックを受け、今は大きな課題として急に重荷を背負ったような重～い圧力を感じる。

ISCO-OP は韓国でも是非広めるべきプログラムである。我が協会はこれをより積極的に取り入れる方針である。ひいては我が協会ばかりでなく、韓国のスポーツ産業に携わる全ての“悩む”方々に紹介させて頂きたい。

スポーツを楽しみ、スポーツの醍醐味を味わおうとする全ての人々に“スポーツで食っていく我々”は何をしてゆくべきかを切羽詰る思いで一杯である。

この場をお借りして、もう一度鹿屋体育大学の川西正志先生を始め、プログラム関係者に深くお礼申し上げる。

